かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解　説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気の高い作品でした。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられています。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使饗応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色です。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩冶（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのお）、大石内蔵助を大星由良助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあります。

本筋の義士劇の他に、若狭助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えています。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲です。

〔あらすじ〕

《大　序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利将軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることとなります。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分けます。

直義と、このたびの饗応役、塩冶判官・桃井若狭助は、兜を宝蔵に納めに行きます。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説きますが、戻ってきた若狭助の機転により、顔世はその場を逃れることができました。怒った師直は若狭助を罵倒、若狭助はかろうじて憤りを抑えます。

《二段目》

〔力弥上使の段〕塩冶判官の国家老・大星由良助の子息である力弥は、明日の登城時間を知らせる使者として桃井家へやってきます。家老・加古川本蔵の娘・小浪が受け取りに出ますが、許嫁である力弥に見とれてしまいます。そこへ若狭助が出てきて口上を受け取り、力弥は帰って行きます。

桃井家の奥座敷。若狭助は、本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だと打ち明けます。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べます。

《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結び、師直の勧めで共に門内に入ります。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。さらに、腰元おかるが顔世から師直への文箱を届けに来ます。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入ります。

〔殿中刃傷の段〕「おのれ師直、真二つ」と意気ごむ若狭助の前に現れた師直は、前日とは打って変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができません。判官がやってきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言います。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまいます。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵でした。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動転します。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとしますが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆきます。

《四段目》

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来

ます。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良助が駆けつけます。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶えます。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡します。

《五段目》

山崎で猟師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れます。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺されます。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫きます。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間でした。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追います。

《六段目》

勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていました。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のものと同じなので勘平は苦悶します。おかるは別れを惜しんで連れて行かれます。

そこへ猟人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできました。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は

色々と尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出てきます。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣きます。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来ました。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えます。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語ります。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかります。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶えます。

《七段目》一力茶屋の段

大星由良助は祇園の一力で遊蕩に耽っていました。血気の若侍が煽っても、足軽の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれています。そこへ由良助の息子・力弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来ます。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からはおかるが盗み読んでいました。由良助はそれに気づき、おかるの身請け話を決めます。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話を聞くうちに由良助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとします。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良助が現れ、平右衛門には供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせます。

《八段目》

加古川本蔵の娘・小浪は、由良助の息子・力弥と許嫁の仲。由良助一家が山科に住んでいること知って、継母・

戸無頼と二人きり、供も連れず山科へと旅を続けます。

《九段目》

雪の山科、由良助の閑居へ、戸無頼と小浪が到着します。由良助の妻・お石は愛想良く出迎えはしますが、賄賂を贈るような追従者の娘と、二君に仕えぬ由良助の大事な子とは釣り合わないと、破談を言いわたします。思い余った母娘が死のうとするのをお石は止めて、祝言をさせたければ本蔵の首をと所望します。本蔵が抱きとめたばかりに、判官は本望を遂げられなかった、その恨みの本蔵の首を婿引出にと迫ります。母娘が再び途方にくれる所へ虚無僧姿に身をやつした本蔵が現れ、わざと力弥の手にかかります。本蔵の本心を見ぬいた由良助に小浪の祝言を頼み、師直屋敷の絵図面を渡して死んでゆきます。

《十段目》

堺の商人・天河屋義平は、召し使いも女房もよそへ出し、一人で討入りの諸道具を調達しています。由良助は、同志の疑念をはらすため、同志を捕手として入りこませ、義平を糾弾しますが、頑として明かしません。由良助はそれを賞して「天河」を討入りの際の合い言葉と決め、鎌倉へと向かいます。

《十一段目》

一同は、稲村ヶ崎に上陸し、雪の中、鎌倉の師直邸に討入ります。由良助は、判官形見の短剣で師直の首をかき、亡君の位牌に供え、焼香します。一同は、菩提寺光明寺へと引き上げます。

増補忠臣蔵（ぞうほちゅうしんぐら）　本蔵下屋敷の段（ほんぞうしもやしき）

〔解　説〕

明治に入ってから作られたと言われる作者不詳の作品。仮名手本忠臣蔵に登場する桃井家の家老・加古川本蔵（かこがわほんぞう）を主人公とした外伝的な物語です。この段のみの作品ですが、当時はかなり人気が高かったようです。

〔あらすじ〕

仮名手本忠臣蔵の大序から三段目で、主人桃井若狭助が高師直を討つのを賄賂を使って防ぎ、また師直に切りつけた塩谷判官を抱き留めた加古川本蔵ですが、その為に主人若狭助の怒りを買い、下屋敷にて謹慎しています。若狭助から成敗を受けるかに見えた本蔵ですが、実はその本意は若狭助に届いており、成敗されることなく暇を与えられます。そして物語は仮名手本忠臣蔵の九段目へとつながっていくのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

仮名手本忠臣蔵

《三段目》力弥上使の段

久方の

空も弥生の黄昏時、桃井若狭助安近の館の行儀掃き掃除、お庭の松も幾千代を守る館の執権職、加古川本蔵行国、年も五十路の分別盛り、上下ため付け書院先歩み来るとも白州の下人

「なんと関内、この間は御上にはでつかちねえ御拵え。都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社参、夥（おびただ）しい御物入り。アヽその金の入り目が欲しい。その金があつたらこの可介、名も改めて楽しむになあ」

「なんぢや、名を改めて楽しむとは珍しい。そりや又何と替える」

「ハテ、角助と改めて、胴を取つて見る気」

「ナニ馬鹿面な。わりや知らねえか。昨日鶴が岡でこれの旦那若狭助様、いかう不首尾であつたげな。子細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定めてまた無理を抜かして、御旦那をやり込めをつたであろう」

とさがなき口々

「ヤイ〳〵、何をざは〳〵と喧しい御上の取り沙汰。ことに御前の御病気、御家の恥辱になる事あらば、この本蔵聞き流し置くべきや。禍は下部の嗜み、掃除の役目仕舞うたら、皆行け、行け」

と和らかに、女小姓が持ち出づる煙草輪を吹く雲を吹く、廊下音なう衣の香や、本蔵が奔走の一人娘の小浪御寮母の戸無瀬諸共に、しとやかに立ち出づれば

「これは〳〵、両人共御前のお伽は申さいで自身の遊びか、不行儀千万」

「イエ〳〵今日は御前様、殊の外御機嫌。今すや〳〵と御休み。それでナア母様」
「イヤ申し本蔵殿、先程御前の御物語。昨日小浪が鶴が岡へ御代参の帰るさ、殿若狭助様、高師直殿と詞争ひ遊ばせしとの御噂。モ誰が言ふとなく御耳に入り、それはくきつい御案じ。『夫本蔵、子細詳しく知りながら自らに隠すのかや』と御尋ね遊ばす故、小浪に様子を尋ぬれば、これも私と同じ事。『何も様子は存じませぬ』との御返事、御病気の障り、御家の恥になる事なら」
「ア、コレ〳〵戸無瀬、それ程の御返事、なぜ取り繕ろふて申し上げぬ。主人は生得御短慮なる御生れ付き。何の詞争ひなどとは女童の口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより、身を果たすが刀の役目、武士の妻でないか。それ程の事に気が付かぬか。窘めさ〳〵。ナニ娘、そちはまた御代参の道すがら、左様の噂はなかりしか、但しあつたか。ナニ、ない、ム、その筈〳〵。ハ、、、何のべしでもない事を。よし〳〵、奥方の御心休め、直に御目に掛からん」
と立ち上がる折こそあれ当番の役人罷り出で
「大星由良助様の御子息、大星力弥様御出でなり」
と申し上ぐる。
「ム、お客御馳走の申し合はせ、判官殿よりの御使ひならん。こなたへ通せ。コレ戸無瀬、その方は御口上受け取り、殿へその通り申し上げられよ。御使者は力弥、娘小浪と言号の聟殿、御馳走申しやれ。まづ奥方へ御対面」
と言ひ捨て一間に入りにける。戸無瀬は娘を側近く
「ノウ小浪、父様の堅苦しいは常なれど、今仰つた御口上、受け取る役はそなたにとありそな所を戸無瀬にとは、母が心とはきつい違い。そもじも又力弥殿の顔も見

たかろ、逢ひたかろ。母に代つて出迎や、ヤ。嫌か、嫌か」
と問ひ返せば
『アイ』とも『嫌』とも返答は、赤らむ顔のおぼこさよ。母は娘の心を汲み
「アイタ〳〵。娘、背を押してたも」
「これは何と遊ばせし」
と狼狽(うろた)へ騒げば
「イヤノウ今朝からの心遣ひ、また持病の癪が差し込んだ。アイタ、これではどうも御使者に逢はれぬ。アイタ、娘、大儀ながら御口上も受け取り、御馳走も申してたも。御主と持病には勝たれぬ、勝たれぬ」
とそろ〳〵と立ち上がり
「娘や、随分御馳走申しや、ヤ。したが余り馳走過ぎ大事の口上忘れまいぞ。わしも聟殿に、アイタ〳〵、逢ひたかろう」
の奥様は、気を通してぞ奥へ行く。小浪は御後伏し拝み〳〵
「忝ない母様、日頃恋し床しい力弥様、逢はゞどう言を、かう言を」
と娘心のどぎ〳〵と、胸に小浪を打ち寄する、畳触りも故実を糺し入り来たる大星力弥、まだ十七の角髪(つのがみ)や、二つ巴の定紋に、大小立派さはやかに、さすが大星由良助が子息と見えしその器量、しづ〳〵と座に直り
「誰そ、お取次頼み奉る」
と慇懃に相述ぶる。小浪は『はつ』と手をつかえ、ぢつと見交はす顔と顔、互ひの胸に恋人と物も得言はぬ赤面は、梅と桜の花相撲に、枕の行司なかりけり。小浪漸々(ようよう)胸押し鎮め
「これは〳〵御苦労千万にようこそ御出で。只今の御

口上受け取る役は私、御口上の趣きをお前の口から私が口へ、直に仰つて下さりませ」
と擦り寄れば身を控へ
「ハア、これは〳〵不作法千万。惣じて口上受け取り渡しは行儀作法第一」
と畳を下がり手をつかへ
「主人塩谷判官より若狭助様への御口上。『明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈のところ、定めて御客人も早々に御出であらん。然れば判官若狭助両人は、正七つ時にきつと御前へ相詰めよと、師直様より御仰せ。万事間違いのなき様に、今一応御使者に参れ』と主人判官申し付け候故、右の仕合はせ。この通り若狭助様へ御申し上げ下さるべし」
と水を流せる口上に、小浪はうつかり顔見とれ、とかう答へもなかりけり。

「オヽ聞いた〳〵。使ひ大儀」
と若狭助、一間より立ち出で
「昨日お別れ申してより、判官殿間違うて御目に掛からず。成程正七つ時に貴意得奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦労千万と、宜しく申し伝へてくれられよ。御使者大儀」
「ハヽア、然からば御暇申し上げん。ナニ、お取次の女中御苦労」
としづ〳〵立つて見向きもせず、衣紋
（繕ひ立ち帰る）

《三段目》殿中刃傷の段

脇能過ぎて御楽屋に鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の寿祝ふ直義公、御機嫌なゝめならざりける。若狭助はかねて待つ師直遅しと御殿の内、奥を窺ふ長袴の紐しめくゝり気配りし、『おのれ師直真二ツ』と刀の鯉口息を詰め、待つとも知らぬ、師直主従遠目に見付け、
「これはこれは若狭助殿、扨々お早い御登城。イヤハヤ我折りました、我等閉口閉口。イヤ閉口序に貴殿に言訳致し、お詫び申す事が有る」
と、両腰ぐはらりと投げ出だし、
「若狭助殿、改めて申さねばならぬ一通り。日外鶴ケ岡で拙者が申した過言、ヲヽお腹が立ったであらう尤もじゃ、がそこをお詫び。その時はどふやらした詞の間違ひでつゐ申した、我等一生の粗忽。武士がコレ手をさげる真平真平。仮令その元が物馴れたお人なりゃこそ。外々の狼狽者で見さっしゃれ、この師直真二ツ。オヽこはやのこはやの。有やうがその節貴殿の後かげ、手を合はして拝みましたアハヽヽ。アヽ年寄るとやくたいやくたい。年に免じて御免御免。コレサコレサ、武士が刀を投げ出だし手を合はす。これ程に申すのを聞き入れぬ貴公でもないはさ。兎角幾重にも謝り謝り。珍才、共々にお詫びお詫び」
と、金が云はする追従とは夢にも知らぬ若狭助、力みし腕も拍子抜け、今更抜くに抜かれもせず、寝刃合はせし刀の手前差しうつむきし思案顔。小柴の蔭には本蔵が、瞬きもせずまもり居る。
「ナニ珍才、この塩冶はなぜ遅い。若狭助殿とはきつい違ひ、扨々不行儀者、今において面出しせぬ。主が主なれば家老で候とて、諸事に細心の付くやつが一人もな

い。いざいざ若狭殿御前へ御供致そ、サアお立ちなされお立ちなされ、サアサア師直め謝っておるぞ。コリャこゝな粋め粋め、粋様め」
「イヤ若狭助最前から、ちと心悪うござるマア先へ」
「何とした何とした、腹痛か。コレサ珍才、お背中お背中。お薬進じょかな」
「イヤイヤそれ程にもござらぬ」
「然(しか)らば少しの内おくつろぎ。御前の首尾は我等がよい様に申上ぐる。珍才、一間へ御供申せ」
と、主従寄ってお手車に迷惑ながら若狭助、『これは』と思へど是非なくも奥の一間へ入りければ、『アヽもふ楽じゃ』と本蔵は、天を拝し地を拝しお次の間にぞ控へ居る。程も有らさず塩冶判官、御前へ通る長廊下。師直呼びかけ、
「遅し遅し。何と心得てござる。今日は正七ツ時と、先刻から申し渡したでないか」
「成程遅なはりしは不調法。さりながら、御前へ出づるはまだ間もあらん」
と、袂より文箱取出だし、
「最前手前の家来が、貴公へお渡し申しくれよ。則ち奥顔世方より参りし」
と、渡せば受取り、
「成程成程。イヤその元の御内宝は扨々心がけがござるは。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼むと有る。定めてその事ならん」
と押し開き、
「さなきだに重きが上の小夜衣(さよごろも)、我がつまならぬつまな重ねそ。ハアこれは新古今の歌、この古歌に添削とはムヽ、ムヽ」
と思案の内、『我が恋の叶はぬしるし。扨は夫に打明け

し』と思ふ怒りをさあらぬ顔。
「判官殿、この歌御覧じたでござらふ」
「イヤ只今見ました」
「ムヽ手前が読むのを。アヽ貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちょと遣はさるゝ歌がこれじゃ、つまならぬつまな重ねそ。アヽ貞女貞女。アその元はあやかり者、登城も遅なはる筈の事。内にばかりへばり付いてござるによって、御前の方はお構ひないじゃ」
と、当てこする雑言過言。あちらの喧嘩の門違ひとは、判官さらに合点行かず、むっとせしが押ししづめ、
「アハヽヽヽこれはこれは師直殿には御酒機嫌か、御酒参ったの」
「いつ盛らしゃった、イヤいつ呑みました。御酒下されても呑まいでも、勤むる所はきっと勤むる。貴公はなぜ遅かったの、御酒参ったか、イヤ内にへばり付いてござったか。貴殿より若狭助殿アヽ格別勤められます。イヤ又その元の奥方は貞女といひ、御器量と申し手跡は見事、御自慢なされ御自慢なされ。むっとなされな嘘ではないはさ。今日御前にはお取込み、手前とても同然。その中へ鼻毛らしい、イヤこれは手前が奥が歌でござる。それ程内が大切なら御出御無用。総体貴様の様な、内にばかり居る者を、井戸の鮒(ふな)じゃといふ譬へが有る、後学のため聞いて置かしゃれ。かの鮒めが僅か三尺か四尺の井の内を、天にも地にもない様に思ふて、不断外を見る事がない。所にかの井戸替へに釣瓶に付いて上がります。それを川へ放しやると、何が内にばかり居る奴じゃによって、悦んで途を失ひ、あちらへはうろうろ、こちらへはうろうろ。挙句には橋杭で鼻を打って、即座にピリピリピリピリピリピリと死にまする、かの鮒めが。貴様もてうどその鮒と同じ事だ。鮒よ鮒よ、鮒だ鮒だ鮒侍だ」

「ムヽ」
「エヽ殿中だ」
「ハアハアハアハア」
「ハヽハヽハヽ」
と出放題。判官腹に据えかね、
「コリャこなた狂気召さったか、イヤ気が違ふたか師直」
「シヤこいつ、武士をとらへて気違ひとは。出頭第一の高師直」
「ムヽスリャ今の悪言は本性よな」
「くどいくどい。ガ又本性なりやどふする」
「ヲヽかうする」
と抜討ちに、真向へ切り付くる眉間の大疵。これはと沈む身のかはし。烏帽子の頭二ツに切り、又切りかゝるを抜けつくゞりつ逃げ廻る折もあれ、お次に控へし本蔵走り出て押し止め、
「コレ判官様御短慮」
と抱きとむるその隙に師直は、館をさしてこけつ転びつ逃げ行けば、
「おのれ師直真二ツ。放せ本蔵放しやれ」
とせり合ふ内、館も俄かに騒ぎ出し、家中の諸武士大小名、押さへて刀もぎ取るやら、師直を介抱やら上を下へと

（立ち騒ぐ）

増補忠臣蔵　本蔵下屋敷の段

行く水の、上へ流るるためしなく、憂きこと、積る行国が、消ゆる間を待つ庭の面、われを仕置の芭蕉葉の、広きも今は恨めしく、人はそれともしら洲なる、御前へこそは引かれ来る。かくと知らせに若狭助、褥の上に座を設け、
「イヤナニ本蔵。今日の成敗余の儀にあらず、その方家柄と申し、勤功に愛で、先祖より家老職を勤めさせ、知行五百石を当て行ふ。しかるに某、さいつ頃鎌倉殿中において、高師直に恨みあつてただ一刀に斬捨てんと存ぜしところ、きやつ低頭平身、イヤモ存外の詫言。コハ心得ずと思ひしが。汝師直が屋敷へ抜け出で、不相応なる金銀をもつて媚びへつらひしゆゑ、師直は討ちもらしたり、しかるところ諸大名の取沙汰にも、若狭助はへつらひ武士、卑怯者と殿中一杯の取沙汰と聞く。その上汝へ遺恨の次第申し聞かせしみぎり、余が目通りで松の一技を切取り、まつこのとほりと金打いたしたでないか。そちや某をたばかつたな」
「ハゝ畏れながらわが君様へ申し上げ奉る。その不可を知つて諫めざるは不忠の第一。諫むればもつて背くに以たり。松が技の金打なにゆゑ表裏に仕るべきや。君ご短慮の木の偏を切つて退くれば、公の一字につつがなく、国家長久祈り奉る」
「ムゝスリヤ松の木の偏を切取りは、国家のため、この若狭助へ諫言の謎とな」
「ハゝご賢慮いかがでござりませう」
「ムゝしからば受けし恥辱はいかに」
「ハゝア、コハ存じよらざる御仰せ。君辱しめらるる時は臣死すと申す」

「黙れ本蔵。さ云ふ汝がなにゆゑに、なぜ切腹は仕らん。命を惜しみのめ〳〵と、蟄居いたせしはなにごと。それでも武士か。イヤサ家老といふか。すでに伴左衛門が申すには、本蔵をきつと御成敗なされねば、お家の瑕瑾（かきん）に相成ると、某へ数度の諫言。ぜひに及ばず、只今死罪に行ふ、ただし異存ばし有かい」

「ハゝア、恐れ入つたる御仰せ、不忠不義の本蔵、イヤモ何しに異存申し上げん、ただ御憐愍（ごれんびん）の御仕置有難くお受け申し奉る」

「オゝよき覚悟、しかし余を恨むであらうな」

「コハ勿体なき御詞。下司下郎のなすべき太刀取、伴左衛門に仰せ付けられ、死後の面目ハゝアありがたく存じ奉る。さりながらただ一言申し上げたきは台子の釜」と云ふを打消し伴左衛門。

「ヤイ〳〵本蔵〳〵。今になつて一言も二言もないはい。自体うぬ、殿様の御遺恨ある、師直を討ちもらし、その上陪臣者のうせる場所でもない大広間へ出をつて、判官公を抱き止め、一つとしてろくなことをさらさねば奴だ。そのやうな馬鹿者を生け置いては、後日の妨げだはい。イザ御前。やや時移ればご帰館の妨げ。イデ成敗」と裾引上げ、すでに討たんと立寄る井浪。

「アゝコリヤ伴左衛門待て〳〵。待てと云はばまづ待て、イヤサ急くことはない。すべて大罪人は長く生け置き、苦しめるも仕置の一つ。モいかにしても憎い本蔵。余人に討たすも残念。身が討ち捨てん。その刀ここへ持て」

と、優美の顔色、しづ〳〵庭へ降り立つて、

「ムゝ覚悟の体はまだしも出かした。ノウ伴左衛門」

「アイヤイヤさやうではござるまい。今かうなつて、しよことがなさの覚悟と見えます。コリヤ〳〵本蔵々々。

わりや殿を卑怯者にしなし、大忠臣の某を、人非人だ、イヤまた不義者などとぬかした。その天罪で今この態（ざま）。ムゝハゝムゝハゝハゝゝアハゝゝゝゝ」

と、嘲弄なじるそのうちに、刀ひらりと若狭助。

「今こそ最期観念」

と振上ぐる手を振返し、ずはと斬つたる井浪が首。水も溜らず打落せば、本蔵驚き、

「コリヤ伴左衛門をお手討」

「アゝイヤその方とても同罪」

と、縄目をすつぱと切払ひ、しづ〳〵座に着き、詞を正し、

「本蔵々々。近う参れ」

「ハゝア」

「その方が科（とが）、今日ただ今相済んだ。長の暇くれるぞ」

「スリヤ一命をお助け下され、長の御暇とな。ハ　ゝゝ

ありがたく存じ奉る」

「ハゝゝゝゝ嬉しいか。嬉しいは道理々々。コリヤ本蔵。妻子を都へのぼし、そちや由良助に対面なし、討たれて死なん心であらうがな。イヤサ隠すに及ばぬ。判官を抱き止めたはそちが誤り。一命捨てねば娘が縁組はさて置き、判官殿が位牌へサ云訳立つまい。この若狭助がためには、身代り同然の判官。スリヤわが命ばかりか先祖へ対し、忠臣義臣とは汝がこと。へつらうても苦しうない〳〵。ナニへつらひ武士は世間にいくらもあるはい。判官が今のありやう、げに後車の戒めと、ふつつり短慮とどまつたもそちが蔭、コリヤ嬉しいぞよ、過分なぞよ。かほどの家来に暇遣はす若狭助が心の内を推量せよ。さりながら義を見てせざるは勇みなし。ただこの上の頼みといふは三世の縁。未来で忠義を尽してくれ」

と、あと云ひさして顔背け、歎かせ給ふ御ありさま。あ

りがたしとも嬉しとも、申し上ぐべき詞もなく。かかる智仁の名将の御馬先でも死すことか、わづかの義理と誤りに、命を捨つる不忠不義、なんと先非を悔み泣き、御顔見上げ奉れば殿も見下し御落涙。紬や袴に雨車軸、流れて外へ、小柴垣庭に、淵なすばかりなり。本蔵手を打ち

「誰そお次の衆〳〵。台子の釜を持ち来られよ」

『はつ』と答て持運べば、本蔵立つて釜の湯を柄杓に移し鉢植に、注ぎかくれば竹蘭の枯れてしぼまる、釜中の毒揚。

「先刻伴左衛門台子にかかり、みな殺しにせんと仕込みし毒薬。立聞きしたる本蔵が幸ひ。天目奉らざるは右の仕合せ。ハレご運強きわが君様」

と、申し上ぐれば若狭助なはも忠義を感じける。しばらくあつて小姓ども、なにかやうすはしら木の台、一重繰りに並べしは、三衣袋に袈裟尺八、餞別とこそ知られけり。

「ナニ本蔵。その袈裟尺八は汝へ餞別。一人の娘を思ふ親の身は、焼野の雉子夜の鶴、巣籠の一曲。またこの一品は、妹三千歳を預け置いたる止宿の一礼、心をこめしこの一書。ソレ由良助が宅へ土産にせよ」

と、手づから給はる御賜物。

「ハゝア、コハありがたし」

と押載き、開けば高師直が、屋敷の住居水門下部屋

「ハゝハゝハゝゝゝありがたし〳〵」

と、戴きすぐに懐中し、土に喰ひ付き三拝九拝、ありがた涙にくれにける。若狭助四方を打ち眺め

「アゝ誠や九技燈火尽きて、ただ暁を期すとかや。名残り尽きず、めでたう門出の盃せい。出立の用意いたせ」

「ハゝ君にはます〳〵ご機嫌やう」

「オゝそちも無事で、首尾よう仕果せ。めでたう、未来で逢はう」

「ハゝア」

〽馴れし衾の、夢を貫く寒山寺。

「ムゝ思ひも寄らぬアノ唱歌は、妹三千歳が、よそながら暇乞ひと見ゆる。本蔵。そちも一曲いたせ。アゝ苦しうない許す」

「ハゝア」

〽送る素足の氷のくさび、朝明の嵐に暮れの雪と、浮かれしことももはや迎ひの駕待つばかり里の、名残りの、柴小船

「本蔵。近う〳〵」

「ハゝ」

「面を上げい」

「ハア」

「われ二十五年の春秋を、朝には教訓の露を払ひ、夕には講説の星を戴き、昼夜旦暮のいつくしみ。満足に思ふぞよ。これがこの世の見納めなるぞ。ムハゝゝゝゝ。出立いたせ」

「ハゝ」

尽きぬ名残りと本歳が、涙を隠す編笠の、深き恵みに浅き縁。

「コレなうしばし」

と三千歳姫、駈出で給へば若狭助、袖の枝折戸袂の関、押囲まれて加古川も、笠のうちより御顔を、見奉れば姫君もいよど涙に糸竹の未来は一つ一越断金。やがて黄鐘鸞鏡は、君に仁あり臣に恩、あるは音律音曲の、栄へ栄ゆる世のためし、筆に、伝へて加古川の武名を、永く残しける。

仮名手本忠臣蔵

《七段目》一力茶屋の段

折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔ひ醒まし、早廓馴(さと)れて吹く風に、憂さを晴らしてゐる所へ

「ちよと往て来るぞや。由良助ともあらう侍が、大事の刀を忘れて置いた。つい取つて来るその間に、掛物も掛け直し、炉の炭もついで置きや。アヽそれ〳〵〳〵、こちらの三味線踏み折るまいぞ。これはしたり、九太はもふ去なれたさうな」

あたり見廻し由良助、釣燈篭の明りを照らし、読む長文(ながふみ)は御台より敵の様子細々と、女の文の後や先、参らせ候ではかどらず、余所の恋よと羨ましく、おかるは上より見下ろせど、夜目遠目なり字性(じしょう)もおぼろ、思ひ付いた る延べ鏡、出して写して読み取る文章、神ならず、ほどけかゝりしおかるが簪、バツタリ落つれば、下には『ハツ』と見上げて後へ隠す文、上には鏡の影隠し

「由良さんか」

「おかるか。そもじはそこに何してぞ」

「わたしやお前に盛り潰され、あんまり辛さに酔ひ醒まし。風に吹かれてゐるわいな」

「ムウ、ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる、ちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝからは言はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか」

「話したいとは、頼みたい事かえ」

「マアそんなもの」

「廻つて来やんしよ」

「イヤイヤ、段梯子へ下りたらば、仲居が見つけて酒にせう。アヽどうせうな。アヽコレコレ、幸ひこゝに九つ梯子、これを踏まへて下りてたも」

と、小屋根に掛ければ

「この梯子は勝手が違うて、オヽ恐。どうやらこれは危いもの」

「大事ない、〳〵。危ない恐いは昔の事、三間づゝまたげても赤膏薬も要らぬ年配」

「阿呆言はんすな。船に乗つた様で恐いわいな」

「道理で、船玉様が見える」

「ヲヽ覗かんすないな」

「洞庭の秋の月様を、拝み奉るぢや」

「イヤモウ、そんなら降りやせぬぞえ」

「降りざ降ろしてやろ」

「アレまだ悪い事をアレアレ」

「喧(やかま)しい、生娘か何ぞの様に、逆縁ながら」

と後より、ぢつと抱きしめ、抱き降ろし。

「何とそもじは、御覧じたか」

「アイ、いいえ」

「見たであろ、〳〵」

「何ぢややら面白さうな文」

「アノ、上から皆読んだか」

「オヽくど」

「アヽ身の上の大事とこそはなりにけり」

「何の事ぢやぞいな」

「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房になつてたもらぬか」

「おかんせ、嘘ぢや」

「サ、嘘から出た真でなければ根が遂げぬ。応と言や、〳〵」

「イヤ、言ふまい」

「なぜ」

「お前のは嘘から出た真ぢやない。真から出た、皆嘘」

「おかる、請け出さう」
「エヽ」
「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けせう」
「イヤアノ、わしには」
「間夫があるなら添はしてやろ」
「そりやマアほんかえ」
「侍冥利。三日なりと囲うたら、それからは勝手次第」
「ハア嬉しうござんす、と言はして置いて笑おでの」
「イヤ、直ぐに亭主に金渡し、今の間に埒(らち)させう。気遣ひせずと待つてゐや」
「そんなら必ず待つてゐるぞえ」
「金渡して来る間、どつちへも行きやるな。女房ぢやぞ」
「それもたつた三日」
「それ合点」
「エヽ忝うござんす」

「どりや、金渡して来うか」
「アヽ騒ぐは〳〵。さすがは花の祇園町、テモにぎわしいこつたなあ。アヽなんとやら、入相の鐘は廓の夜明けかな、とはよく言つたものだなアハヽヽヽ。それはさうとどうぞ首尾よう妹に逢ひたいもんだが、幸ひの女中、ちょと物が尋ねたい。この郭に山崎辺からかるといふ女が勤めに来て居る筈だが、御存知ならちょつと教えてくれねえか」
「エヽ何ぢや知らぬが用があるなら勝手へ往て問うたがよいわいな」
「サア、さうは思つたが、勝手も何かゴタゴタと忙しさうだ。コレどうぞさう言はずと、御存知ならどうか教えてくれろ」
「エヽ知らぬわいな」
「これはしたり、すげねえ女だな、マアさう言はずとち

よつと教えてくれろ、御女中、どうか教えてくれろ、わりや妹でねえか」
「エヽお前は兄様、恥しい所で逢ひました」
と、顔を隠せば
「苦しうない、〳〵。関東よりの戻りがけ、母人に逢うて詳しく聞いた。お夫の為、主の為、よく売られた。でかした〳〵〳〵ナア」
「さう思ふて下さんすりや、わしや嬉しい。したがまあ喜んで下さんせ。思ひがけなう今宵請け出さるゝ筈」
「それは重畳。シテ何人のお世話で」
「お前も御存知の大星由良助様のお世話で」
「何ぢや、由良助殿に請け出される。それは下地からの馴染みか」
「なんのいな。この中より二三度酒の相手、夫があらば添はしてやろ、暇が欲しくば暇やろと、モ結構過ぎた身

請け」
「さてはその方を早野勘平が女房と」
「イエ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」
「ムウ、すりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存なねえに極まつたな」
「イエ〳〵、これ兄様、あるぞへ、〳〵」
「あるとは何が」
「サア、高うは言はれぬ。コレ、かう〳〵」
と、囁けば
「待て、〳〵〳〵〳〵ソーレ」
「ムウ、すりやその文確かに見たな」
「残らず読んだその後で、互ひに見合はす顔と顔。それからぢやらつき出して、つい身請けの相談」
「アノ、その文残らず読んだ後で」

「アイナ」
「ムウ、それで聞こえた。妹、とても遁れぬそちが命、身どもにくれよ」
と、抜き打ちに、はつしと切れば、ちやつと飛び退き、
「コレ兄様、わしには何誤り。勘平といふ夫もあり、きつと二親あるからは、こな様のままにもなるまい。請け出されて親夫に、逢はうと思ふがわしや楽しみ。どんな事でも謝らう、許して下んせ、許して」
と、手を合はすれば平右衛門、抜身を捨てゝ、
「可愛や妹、わりや何も知らねえな。親与市兵衛殿は六月廿九日の夜、人に切られてお果てなされた」
「ヤア、それはマア」
「コリヤ、びつくりするな、びつくりするな。まだ後にびつくりの親玉があるわい。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はな」
「兄さん、勘平さんは」
「その勘平は」
「勘平さんは」
「勘平は、勘平で、やつぱり勘平だわい」
「コレ兄さん、勘平さんにはよい女房さんでも出来たのかえ」
「エヽイ、そんな陽気な事ちやねえわい」
「そんなら兄さん、どうさしゃんしたえ」
「その勘平はな、腹を切つて死んだわやい」
「エヽ、〳〵」
「アヽ驚きは尤も、道理だ〳〵。ガこれには、何だ、様子のある、アヽしまつた、コリヤ妹が目を廻した、てつきりさうであらふと思ふた。誰かいねえか、誰か水を持つて来てくれろ。待てのるな、のるな。幸いの手水鉢、アヽ今水をくれるぞ。ソリヤ水だ。おかるやい、妹やい、

気が付いたか、〳〵」
「オヽお前は兄さん」
「オヽ兄だ、平右衛門だ、面を見ろ〳〵」
「コレ兄さん、勘平さんはどうさしやんしたえ」
「エヽ情けねえ、又尋ねるのかやい。その勘平はな、友朋輩の面晴れに、腹を切つて死んだわやい」
「ヤア〳〵〳〵それはマアほんかいな。コレのうのう」
と、取り付いて
「コレ兄さんどうせう」
「道理だ」
「どうせう」
「道理だ」
「どうせうどうせう、〳〵ぞいなあ」
「オヽ道理だ〳〵。様子話せば長い事、お痛はしいは母者人、言ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら泣き死にするであろ、必ず言つてくれなとのお頼み。言ふまいとは思へども、とても遁れぬそちが命。サその訳は、忠義一途に凝り固まつた由良助殿、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし。もとより色にはなほ耽けらず、見られた状が一大事、請け出だして刺し殺す思案の底と確かに見えた。よしさうのうても壁に耳、他より洩れてもその方が科（とが）、密書を覗き見たるが誤り、殺さにやならぬ。人手に掛けよりわが手に掛け、大事を知つたる女、妹とて許されずと、それを功に連判の、数に入つてお供に立たん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば数には入れられぬ。聞き分けて命をくれ、死んでくれ、妹」
と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げ、せき上げ
「便りのないは身の代（しろ）を、役に立てゝの旅立ちか、暇乞

ひにも見へそなものと、恨んでばつかりをりました。勿体ないが父さんは非業の死でもお年の上。勘平さんは〳〵三十になるやならずに死ぬるのは、さぞ悲しかろ、口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、何故逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬは私が身の因果、何の生きてをりませう。お手に掛からば母さんがお前をお恨みなされましよ。自害したその後で、首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。さらばでござる兄さん」

と、言ひつゝ刀取り上ぐる

「ヤレ待て暫し」

と止むる人は由良助、『ハツ』と驚く平右衛門、おかるは

「放して殺して」

と、焦るを押へて、

「ホウ、兄妹とも見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を許す。妹はながらへて、未来への追善」

「サア、その追善は冥途の供」

と、もぎ取る刀をしつかと持ち、

「獅子身中の虫とは儕(おの)れが事。我が君より高知を頂き、莫大の御恩を着ながら敵師直が犬となつて、ある事ない事よう内通ひろいだな。四十余人の者共は、親に別れ子に離れ、一生連れ添ふ女房を君傾城の勤めをさするも、亡君の仇を報じたさ。寝覚めにも現(うつつ)にも、御切腹の折からを思ひ出しては無念の涙、五臓六腑を絞りしぞや。取り分け今宵は殿の逮夜(たいや)、口に諸々の不浄を言ふても、慎みに慎みを重ぬる由良助に、よう魚肉を付き付けたなア。否と言はれず応と言はれぬ胸の苦しさ。三代相恩の主君の逮夜に、喉を通したその時の心、どの様にあらうと思ふ。五体も一度に悩乱し、四十四の骨々を砕

くる様にあつたわやい。チエヽ獄卒め、魔王め」

と、土に摺り付け捻ぢ付けて、無念涙にくれけるが

「ソレ平右衛門、喰らひ酔うたその客に、加茂川でナ」

「いかゞ計らひませうか」

「水雑炊を喰らはせい」

「ハヽア」

「行け」

「ヤ、シテコイナ」